

# 研究余話Ⅲ 上滝不動磨崖仏について

古川 知明

(埋蔵文化財センター所長)

## はじめに

立山連峰から流れ出る常願寺川は、富山市上滝から下流に広大な扇状地形を形成し、その傾斜の急なことは日本有数である。扇頂部にあたる上滝地区において、高位段丘が発達し、その段丘崖の高さは数十mもある。

本稿で報告する上滝不動寺磨崖仏は、この段丘崖下部に彫刻された不動明王磨崖仏で、上市町日石寺の大岩不動磨崖仏の兄不動の伝承をもち、「上滝不動尊境内」として富山市史跡に指定されている<sup>1)</sup>。本稿では「上滝不動磨崖仏」と呼称する。ここでは略測図を提示し、この磨崖仏について年代・意義等の再検討を行う。

## 1 史料・研究史

上滝不動磨崖仏に関する記述について表1にまとめた。18世紀前半までに、滝あるいは不動滝の記述が見えるが、不動明王あるいは上滝不動磨崖仏についての具体的な記述はない。その初出は、享保18年(1732)以降成立とされる『越中旧事記』である。岩山に彫付けた不動明王が存在し、すでに見分け難いほど劣化しているという。このことは滝の水や軟弱地質<sup>2)</sup>を考慮したとしても、かなり以前から存在したことを示唆する。上滝不動尊・不動滝・不動尊森などの具体的な構成要素は18世紀中ばまでに揃ったとみられる。その後幕末までに不動堂・不動池・不動碑が加わった。

明治38年浅地倫は、祠に入った不動尊の「石像」を紹介した(『立山権現』)。

金森久一は、上滝不動磨崖仏を大岩不動磨崖仏に先立ち刻まれたと推定した〔金森1937〕。

京田良志は、大岩不動磨崖仏の分析において、上滝不動は、形相や追刻の2像の配置あるいは伝説に至るまで大岩不動磨崖仏と一致することから、江戸末期から明治初期の作と考えた〔藤原1958〕。その後、3体の像の規模・様式を明らかにし、また、周囲に残る18世紀代の石造物の存在等から造像年代を見直し、18世紀代にすでに現在の前身となるものがあったと修正した〔藤原1960〕。

## 2 上滝不動磨崖仏の概要

### (1) 現状(写真1~4)

上滝不動磨崖仏は、東西16m、南北10mの滝壺の奥に、鉄筋コンクリート製覆屋の内部に保護されている。覆屋は滝壺面から高さ4.5mから立ち上がり、屋根高3.3m、奥の崖面で高さ約5mである。磨崖仏の壁面整形は、そこから約3m上から行われており、その上約3m

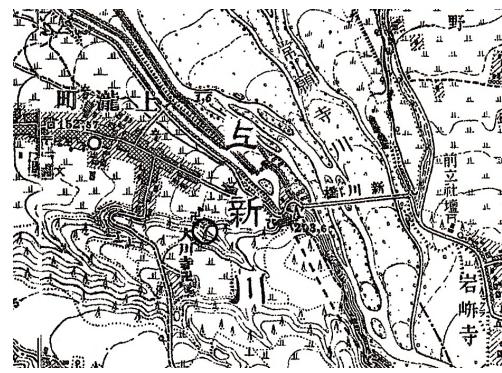


図1 上滝不動磨崖仏の位置

(1:25,000 明治44年地形図)

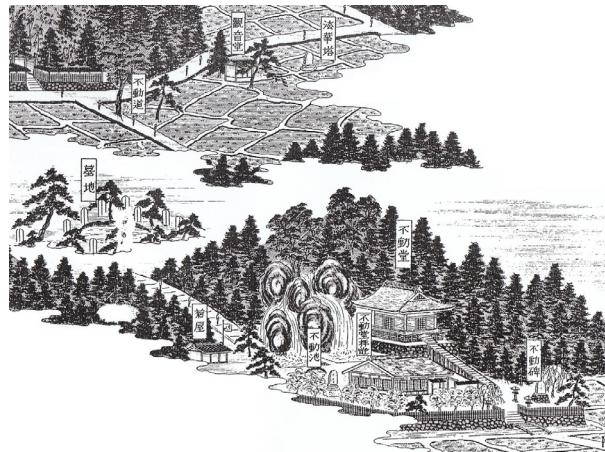


図2 『越中宝鑑』に見る不動堂・不動滝

(左上が大川寺)

1)

2)

和歴	西暦	事項・典拠	表現
神亀2	725	行基作不動尊	
応永2	1395	滝社創建(祭神瀬織津姫神)	
応永2	1395	大川寺創建(『越中宝鑑』)	
永享10	1438	大川寺創建(真言から曹洞へ改宗)	不動守護?
明応元	1492	大川寺創建(『酒井家文書』)	
16世紀		板碑(キリーグ)	
元和元	1615	大川寺寺地寄進(八丁四方)・御寺鎮守森五百歩	山下に滝の宮
万治2	1659	滝社境内社市姫社	
?		『越中史徵』巻六	上滝村 不動滝
元禄15	1702	『温故集録』巻三十一	上滝村 不動滝
享保18以降	1732	『越中旧事記』上滝不動尊	不動明王滝の落つる岩山に彫付あるなり其像見分けがたし
延享元	1744	大川寺文書(『大山町史』)	滝ノ不動尊森
延享4	1747	燈籠寄進(四方新町本江屋九右衛門)	
安永8	1779	宝篋印塔造立	南無滝大聖不動明王
文化文政	19c 前半	青木北海『越中地誌』巻三六 上滝不動尊	越中旧事記云不動ノ像滝ノ落ル岩ニ彫付アリ其像正シク見ワケ難シ
江戸期		上滝周辺絵図(県図T092.93-29)	不動堂
明治初期		『大山町史』	金沢の石工を招いて以前の不動が滅びた後に造顕したものといい伝え
明治31	1898	『越中宝鑑』「滝脇山大川寺之景」(図2)	不動堂・不動堂拝殿・不動池・不動碑
明治36	1903	浅地倫『立山権現』	祠に安置せる不動尊の石像
昭和11	1936	金森久一1937「文珠寺山見学」	岩壁に高く刻まれた不動尊

表1 上滝不動磨崖仏関連年表

が自然崖面である。よって、頂上から滝壺面までは約 15.5m の高さがある。なお、この滝壺及び覆屋は近代に造築されたもので、覆屋左右に 3 条ずつ龍頭から水が落ちる構造とされた。

壁面はやや内湾しており、覆屋天井で像部分全体が保護されているが、像よりの上の一部と、左右の覆屋壁面の接触部は一部削られて損壊している。内部は大部分が剥落しており、天井部からの雨漏りも多く認められる。下部は崩落土が堆積し、草苔類が繁茂している。

(2) 磨崖仏(図 3、写真 5~20) 3 体を彫る。中央に主尊、両側に 1 体づつ脇侍がある。

①主尊 像高 420cm、左右の肘幅 430cm、台座高 60cm。左右の耳を刻出する。左耳上部に辯髪の痕跡を残す。右肘を曲げている。光背部肩上に火焰光とみられる刻線 2 本が残存する。縦方向に筋彫も顯著である。方形の瑟瑟座上に右肘を張って坐する不動明王像か。

付随して顔の右にやや離れて円形を基調とする浮彫文様が見られるが、图案が特定できない。

②左脇侍 像高 150cm、左右肘張 130cm、蓮台高 30cm。蓮台下の円形状の彫込みは雲文と推定される。頭光形式で、傘状の放射光がよく残る。右肩に衣文を刻出する。向かって右に来迎光の雲足を張り出す。来迎相の定印阿弥陀如来坐像で、雲・蓮台上に結跏趺坐する姿か。

③右脇侍 像高 130cm、左右肘張 106cm。右手を膝前に置き、左手は左膝の上に置くか。

頭部は剥落しているが、円頂で、左肩上に団扇形の持物を持つ僧形坐像と推定される。蓮台の下に茎状とみられる削り出しが明瞭に見られるが、文様や構成は不明である。

### 3 周辺の石造物

滝壺上に架けられた階段下は、6m×8m の敷地の中に、宝篋印塔・板碑・燈籠一対などの石造物と植栽がなされた一角がある。

(1) 宝篋印塔(図 4、写真 23~27)

不動寺境内にあたる磨崖仏直下には安永 8 (1779) 年造立の宝篋印塔 1 基がある。上から相輪(九輪より上欠損)・笠・塔身(軸 1・反花・軸 2・請花・饅頭形)・基礎 2 段・基壇 5 段である。現存高 313cm、復元高 336cm (11.1 尺) 安山岩製である。軸 2 刻銘によれば、滝

脇山大川寺 24 世祖山住職代に、弟子翁諱らが願主となって造立したものである。北となる正面には、瀧の守護である不動明王への献奉を目的とするものである。左面は法華経回向文である。裏面には礎石經と經典 2 部を納めたとする。これらは基壇内部に納められた。なお祖山朗明は天明 3(1783)年死去している。

【正面】奉獻御寶前／南無瀧大聖不動明王／寶筐印塔

【左面】願以此功德／普及於一切／我等與衆生／皆共成佛道：法華經引用〔回向文〕

【裏面】石經壺部紙經貳部／奉納大乘妙典經三部／内壺部羽根屋源三郎 署寫

【右面】安永八歲亥二月初吉日／瀧脇山二十四世祖山和尚代／願主徒弟翁諱及十方施主

#### (2) 板碑 (図 5、写真 22)

宝筐印塔南側に自然石板碑 1 基がある。河川転石の 1 面をノミ整形 (ハツリ) により平面とし、その上部に直径 27cm (9 寸) の月輪を彫りくぼめる。中央上部には梵字キリークの陰刻がある。刻字は幅が細く、断面 U 字状に彫られる。キリークは中央より上にあり、左下と右下にはそれより小さい梵字のような彫り込みがあるが、明確に判読できない。それらの字形からみて、この三尊は、阿弥陀三尊ではなく、キリークを千手觀音とみた千手觀音三尊とみられる。左側面全体と右側面下部にノミ整形 (筋ノミ) を行う。頂部は前面からゲンノウによる小割取りを行い、頂部を円形に仕上げている。頂部は尖らせていない。地上露出部分の高さ 62cm、最大幅 46cm、最大厚 25cm。年代は、富山市江本経塚の享禄 4 (1531) 年銘板碑と類似することから、16 世紀前半、戦国時代後期と推定される。

#### (3) 燈籠 (図 6、写真 28・29)

宝筐印塔南側に東西 2 基 1 対がある。四角柱の石柱に笠・宝珠を乗せるもので、原形は四角形燈籠と推定され、火袋・中台を欠失する。西燈の宝珠は後補品である。

竿の 1 面に「延宝四丁卯暦／奉寄進／九月吉祥日口 四方新町本江屋 九右衛門」と刻銘がある。延宝 4 年 (1676) 造である。本江屋九右衛門は、四方新村を村立した畔田九右衛門である。畔田氏は上滝出身で、九右衛門は大川寺信徒であった可能性がある。

#### (4) 石仏 (写真 30~32)

周囲には石仏が複数所在する。そのうち不動明王を彫る舟形石仏が 3 体存在する。

1 (写真 30) は、高さ 13.5 寸、幅 7.7 寸で、不動瀧と磨崖仏の間の祠内に置かれる。この石仏は、塩照夫が聞き取りした滝壺跡から発見された石仏とみられる [塩 1983]。銘等はなく年代も不明。安山岩製。

2 (写真 31) は、高さ 22.5 寸、幅 13.2 寸で、石仏 1 の前に集積された石仏群の 1 体である。火焔光が強調されている。銘等はなく年代も不明。立山天狗山石製。

3 (写真 32) は、高さ 15 寸、幅 8.5 寸で、頂部が欠損し、本体上部が折れている。磨崖仏覆屋の前に置かれている。銘等はなく年代も不明。安山岩製。

## 4 考察

上滝不動磨崖仏の当初形態の復元を試みる。

現在、不動瀧は磨崖仏から約 15m 東に所在する (写真 33)。これは瀧上部で分水し、一方は隧道を掘り、上滝不動磨崖仏両側の瀧水に導水し、もう一方は崖を削って現在の位置に流している。これらは近代の造作であって、明治以前はその中間の地点に瀧が流れていたと思われる。この上部には小さな谷地形があり、また現在地表に大きな窪地痕跡が見られることから、そこが滝壺であったと思われる (写真 34)。この情景は、『越中宝鑑』にみる不動瀧の西に不動堂を描いた構図と同じである。今回調査では確認できなかったが、京田良志は建物に関連すると思われるホゾ穴の存在を報告している [藤原 1960]。上滝不動磨崖仏には日石寺のような覆屋としての堂建築があり、磨崖仏を保護していたと推定される。浅地が報告した堂に入った「石像」 [浅地 1905] とは、不動堂内の上滝磨崖仏のことを指すのである。

上滝不動磨崖仏は、上市日石寺の大岩不動磨崖仏と類似した特徴をもつ磨崖仏である。中央に不動明王坐像、左右に阿弥陀如来坐像・僧形坐像を配置する。大岩不動磨崖仏ではその外側にそれぞれ童子立像があり、当初の不動三尊に、坐像が追刻されたと理解されている。本例では現在童子像が欠失するが、存在していたかどうかは近代の改変のため確認できない。

これまで上滝不動磨崖仏は、大岩不動磨崖仏の模刻とされ、江戸時代に築造されたものと理解されてきた。阿弥陀如来像の後光の存在をもって大岩より後出的であるとする事、世の要素とする明治初期の改刻が伝承されていることなどの要素があるが、構成や像形文様の様式・克明さからみて、大岩不動磨崖仏と近い年代の製作と理解できよう。

これまで論じられてきた立山信仰における禅定道の区分、すなわち岩崎寺を起点として常願寺川を遡るルートと大岩日石寺を起点として上市川を遡るルートという2大ルートは、天台宗と真言宗という対置的な宗派の相違によるものであるという考え方〔高瀬 1981〕に基づいてきたが、前者の拠点を岩崎寺ではなく、対岸の上滝不動磨崖仏と理解すれば、両社ともに「不動明王磨崖仏」を起点とする共通した構図となる。また上滝不動磨崖仏は、曹洞宗大川寺の管理下にあるが、この寺は以前真言宗であった〔久保 1998〕ということに基づけば、両者とも真言宗という共通性も浮上してくる。このような二者の同一構図の存在について、再度検証すべきである。

また、大岩不動磨崖仏・上滝不動磨崖仏においては、それぞれ磨崖仏周囲に板碑や礫石経を包含する場所、大岩ではさらに京ヶ峰経塚を内包しており、それらの空間は一種の小靈場構造として把握される〔川又 2006〕。上滝不動磨崖仏では16世紀前半の板碑が存在することから、中世後期に小靈場化が開始されていたと推定される。

上滝不動、大岩不動とともに、古代の不動明王信仰に基づき造立されたことは、高瀬重雄により説明されている。不動明王は、「滝のある淨地に止住して、修行者を導く」者であり、山林抖擞の山岳信仰者を守護する性格からこれを帰依するものである〔高瀬 1969〕。このようなことから、信仰者あるいは修験者らが立山禅定道を行く起点となる2か所に、清めと守護の祈願を目的として同じように不動明王の磨崖仏と滝を配置したことは、これまで指摘された立山信仰における不動明王との結合の構造を、改めて問い合わせ直す必要性を提起するものである。

## おわりに

本稿作成にあたり、松浦正昭・西井龍儀・小松博幸・大川寺ご住職のご理解ご協力を得た。記して謝意を申し上げる(順不同・敬称略)。

## 注

- 1 昭和59年2月22日旧大山町指定。管理者：曹洞宗瀧脇山大川寺。所在地：富山市上滝字滝ノ沢割。
- 2 崖の地質として一様に砂岩質と報告されているが、帶磁率が高く、凝灰岩である。

## 文献

- 浅地 倫 1905 『立山権現』 中田書店  
大山町史編纂委員会編 1964 『大山町史』 大山町  
大山の歴史編纂委員会編 1990 『大山の歴史』 大山町  
金沢市立玉川図書館近世資料館編 2007 『温故集録』三 金沢市図書館叢書(六)  
金森久一 1937 「文珠寺山見学」『高志人』第2巻第1号 高志人社  
川又隆央 2006 「靈場研究の方法」「遺跡研究の方法」東北中世考古学会  
京田良志 1976 『越中の石造美術』富山文庫5 巧玄出版  
久保尚文 1998 「室町前期、越飛間の宗教交渉と政治情勢」「情報と物流の日本史」雄山閣出版  
塙 照夫 1983 『越中の街道と石仏』北國出版社  
高瀬重雄 1969 『古代山岳信仰の史的考察』角川書店  
高瀬重雄 1981 『立山信仰の歴史と文化』名著出版  
富山郷土研究会編 1932 『越中旧事記 前田氏家乘』中田書店  
藤原良志 1958 「大岩不動の系譜」「越中史壇」14号 越中史壇会

- 藤原良志 1960 「富山県における形式的磨崖仏」『越中史壇』19号 越中史壇会
- 文山純子・平井一雄 2015 「上滝不動尊」『北陸石仏の会々報』第48号
- 松浦正昭 2007 「立山信仰と大岩日石寺磨崖仏」『富山大学地域連携プロジェクト 人文学部日本海総合研究プロジェクト 平成18年度公開講演会 北から登る立山信仰—上市黒川遺跡群と大岩日石寺磨崖仏—』講演資料集
- 米原 寛 2008 「「劍岳信仰」をめぐる若干の考察」『富山県[立山博物館]研究紀要』第15号
- 渡辺市太郎編 1898 『越中宝鑑』(1973『越中資料叢書 越中宝鑑・越中地誌・越中旧事記』歴史図書社)



図3 上滝不動磨崖仏 略測図 (1:60)

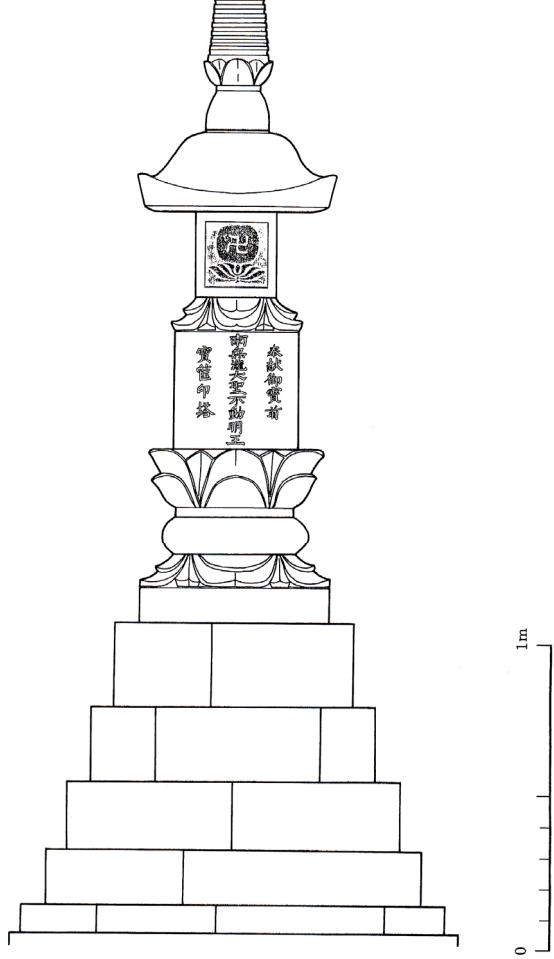


図4 不動寺境内宝篋印塔 実測図 (1:25)

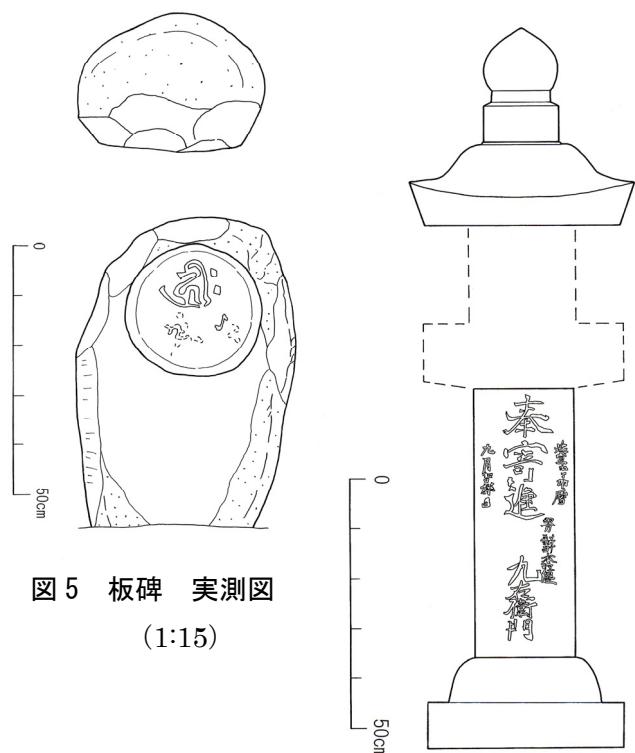


図5 板碑 実測図  
(1:15)

図6 燈籠 実測図  
(1:15)





写真1 上滝磨崖仏・不動寺



写真2 上滝不動 全景



写真3 上滝不動 覆屋



写真4 磨崖仏前石標・板碑

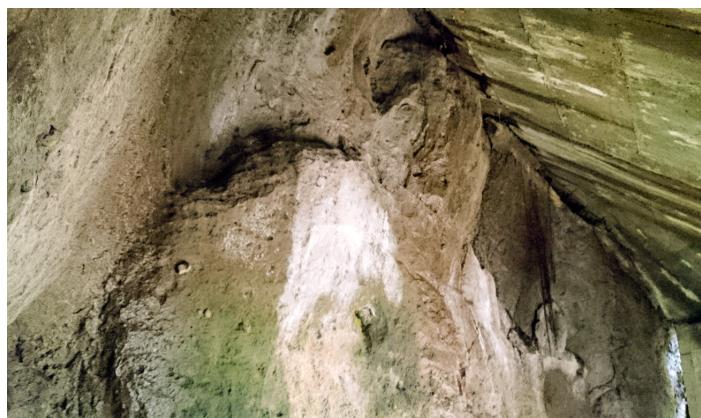


写真5 中央仏（不動明王）上半部

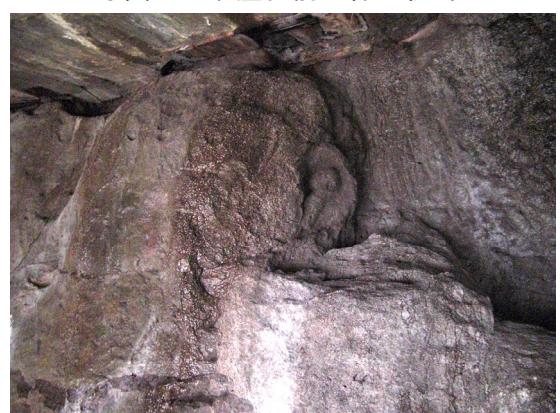


写真6 中央仏 頬(右から)



写真7 中央仏 上半

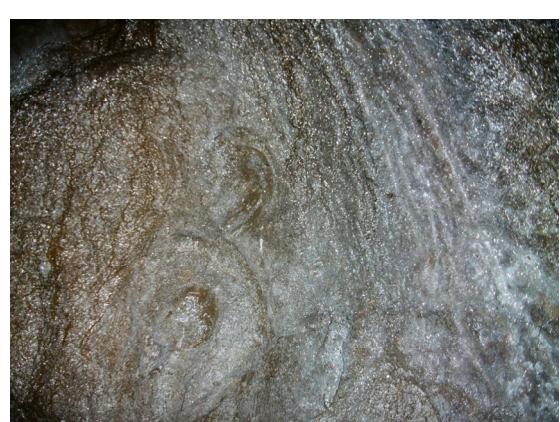


写真8 中央仏 左耳

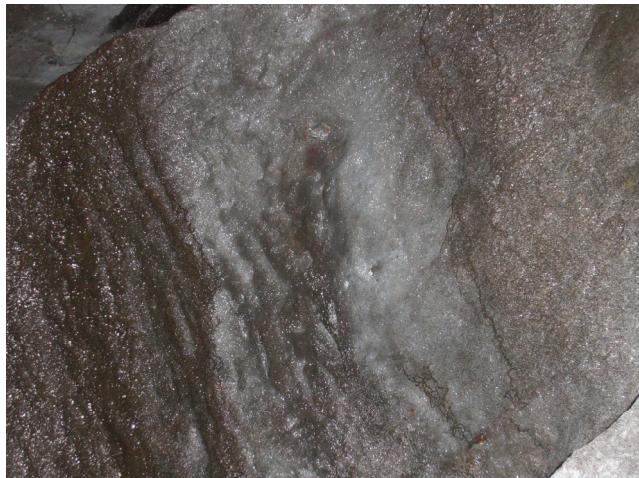


写真9 中央仏左 不明文様

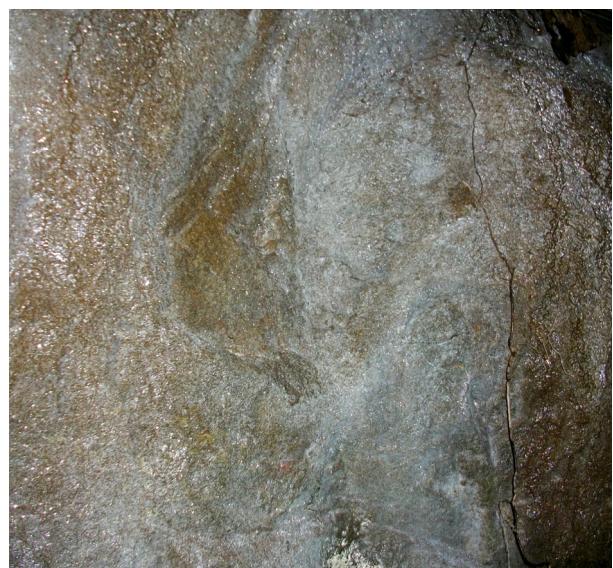


写真10 中央仏左 不明文様



写真11 中央仏 胸部右から



写真12 中央仏 下半部・台座



写真13 左仏 台座下彫り込み



写真14 左仏 持物（団扇）

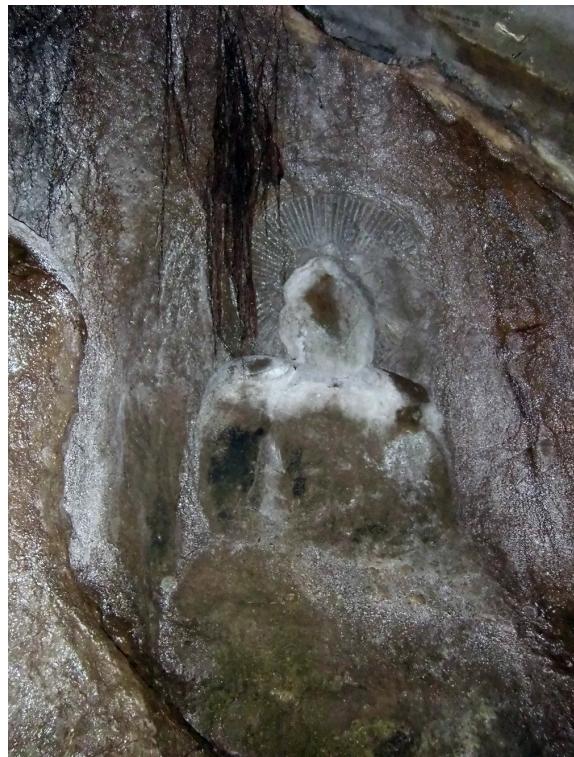


写真 16 右仏 全体

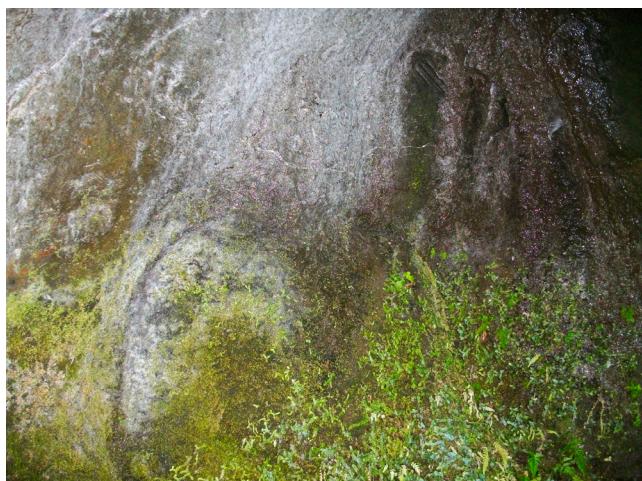


写真 15 左仏 上半部



写真 17 右仏 頭光



写真 18 右仏 頭光細部

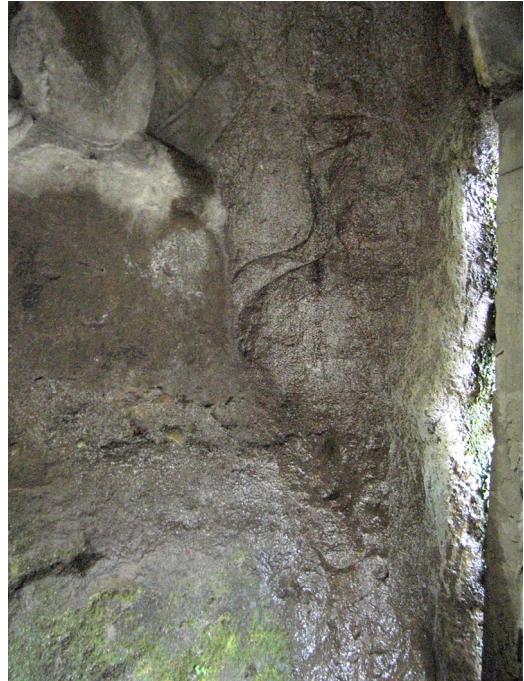


写真 20 右仏 来迎光の雲足

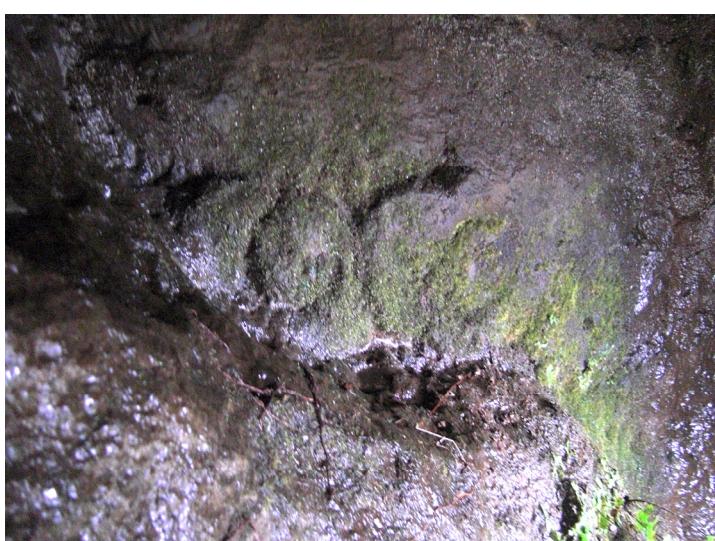


写真 19 右仏 台座(祥雲)



写真 21 宝篋印塔・燈籠



写真 22 板碑



写真 23 宝篋印塔 (安永 8 年)

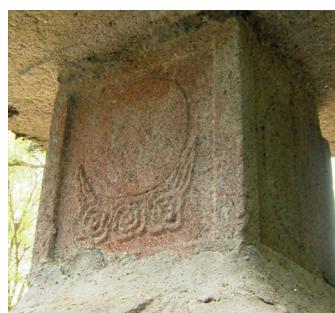


写真 24 軸 1



写真 25 軸 2 正面刻銘



写真 28 燈籠 (享和 4 年)



写真 26 軸 2 裏面刻銘



写真 29 燈籠 竿・基礎



写真 27 基礎 碓石経投入口



写真 30 舟形石仏 1



写真 31 舟形石仏 2



写真 32 舟形石仏 3



写真 34 旧滝壺跡推定地

白破線が滝壺跡推定地、現在の滝は写真の左側



写真 33 現在の不動滝

富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報

### 富山市の遺跡物語 第 17 号

平成 28 (2016) 年 3 月 31 日

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町 1-2-24

TEL.076-442-4246 FAX.076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 前田印刷株式会社